

# 中国留学を経て

情報文化学科 2年 加藤龍太

留学する以前私はこの留学で会話力の向上、中国の文化・歴史に対する理解を深める他に、中国での経験を日本にいる人に伝えることも目的としていました。そのような目的を決めたきっかけは去年中国に留学した先輩方による体験談を聞いたことです。中国の反日デモ報道を見たことがある私は中国の人に対してあまり良い印象を持っていませんでした。しかし、体験談の内容は中国の人は日本人だと分かっても優しく接して、それは学外でも同じだったというものでした。そのお話を聞いて私は偏った考え方しかなかったことを知り、また中国に対する印象も良い方向に変わりました。そのような訳で私も実際に中国を訪れて、良いところをたくさん見出し、それを日本にいる方々に伝えることで中国に対する印象をより良いものにしたいと考えておりました。私達中国へ派遣留学した同志もみな中国での留学生生活を充実させようと一生懸命勉強し、外国の友人と遊びに出かけ、悔いのないよう毎日を楽しく過ごしました。中国での留学生生活はとても楽しいもので充実しており一生忘れられない思い出となりました。その中でも特に忘れられない思い出三つを紹介したいです。

一つ目は万里の長城での思い出です。9月27日に学校主催の万里の長城ツアーがありました。私は今まで世界遺産というものを日本ですら見たことが無かったので、初めての世界遺産を見れたということにとっても感動しました。実際に見る前は友人と万里の長城を端から端まで走ってみようとして笑って話していましたが、あのスケールの大きさで地平線の向こうまで続く道りを見たらそんなことは1日では絶対に出来ないのだと実感しました。万里の長城から見える景色は全面どこも山や丘陵が続き、はるか昔から敵の侵入を防ぐために作り続けてきたのかと思うとロマン溢れる光景なのだと感じました。しかし、事件は唐突に起きて万里の長城で留学メンバーの一人があることが原因で歩くことが出来ないケガを負ってしまいました。まだ留学を始めて一ヶ月ばかりの私達は中国語で細かく説明することが出来ず、先生方にもケガして戻れないことを伝えることが出来ませんでした。この時に言葉が通じないという外国での恐怖と班長としてなにも出来ない悔しさを痛感しました。しかし、何もせずにいることは出来ず、とにかくみんなでやれるだけのことはやろうと、近くの日本人の方に助けを呼んでもらったり、現地の人に今いる場所を聞いたり、とにかく電話で助けを呼び、なんとか北京大学の先生方に担架を持ってきてもらい万里の長城から帰れる事が出来ました。その時に見知らぬ中国人や外国の人が水をくれたり楽な姿勢のとり方をジェスチャーで伝えてくれたり、言葉は通じなくても人々の優しさに触れて、外国での不安というものはこの時に無くなりました。また、留学メンバーみんなで協力して救助したときに、特に仲が深まり結束したと感じました。良い思い出ではありませんが、忘れられることが出来ないみんなとの思い出です。

二つ目は北京「の夜」というイベントに参加したことです。毎年師範大学では12月頃に留学生がそれぞれ自国の文化や歌・踊りなどを発表し拡散することができるイベントが開かれます。毎年2000人程の来客があり、北京市内の大学でも最大規模のイベントなのだそうです。小中学校の音楽発表会などで体験した以上の観客数だったので私にとってこれほど多い人の前でなにかを発表するのは初めての経験でした。そのイベントに私たちも日本人会が提案してくれた鳴門踊りで参加することにしました。2ヶ月間大学の授業が終わると夜にみんなで集まって踊りの練習をすることは他の日本の大学の方と交流を図ることができ、また日本の伝統的な踊りを見につけることができたことはとても貴重なものだと思います。メンバー全員でこの踊りはこうするとより良くなるなど普段自分の意見をあまり出さない留学生メンバーも積極的に話し合っってアイデアを出し合い、みんな前より活発になったと感じました。本番の時にはクラスメートの外国人が観覧しにきて、私達の踊りを賞賛してくださりました。他のクラスメートも自国の踊りを踊ったりして、みんなでお互いを褒めあい普段の授業ではとれないような交流を持つことが出来ました。私の中で最も印象深かったのは中国のカンフー演技です。模造刀を使っっての演技や拳を使っっての迫力あるアクションはさすが

ら映画のワンシーンのようで私もカンフーを習ってみたいと思わせるほど憧れるものがありました。また、私達の踊りを見て教えて欲しいというクラスメートもいました。自分達の文化に興味をもってくれるのは嬉しいことだと思い、私も積極的に外国の文化を知ろうと友人たちに尋ねるようになりました。このことがきっかけでより外国の友人と仲が深まり、文化交流というものを感じました。

三つ目の思い出はルームメイトのネパール人、プラナヤと過ごした日々です。私は留学する以前まったく中国語を話せない状態で留学に臨みました。彼と会う前は外国の人と一緒に暮らすことに不安を感じていて、仲良くはなれても表面上だけのものだろうと思っていました。彼と初めて会った時は予想通り会話することができなかつたのですが、英語を使って筆談を試みると彼は快く応じてくれ私達の交流が始まりました。彼が6歳年上であることを知り、仲が悪くならないようにと緊張を感じ続けながら過ごした生活は彼の誕生日会を開いた日から変わり始めました。誕生日の時私は彼と交流のある日本人の人に協力してもらい大勢で食事会を開き、寄せ書きなどのプレゼントを渡し共に誕生日を祝福しました。その時彼は「カトウはいつもよそよそしく私のことを嫌っていると思っていた。だから今日祝ってくれて君の気持ちを知ることが出来てとても嬉しい。」と打ち明けてくれました。私のこの態度が逆に彼に悪いように働いたのだと知り、私も胸の内を話してから、彼と本当の意味で友達になれたと思いました。時間割が合う日はいつも定番の朝ごはんを二人で食べ歩きながら一緒に登校して、授業から帰ったらその日習った文法や単語を使って会話することで復習し、ベランダで涼みながら色んなことを話し合うのが日課でした。留学後中国語の上達を感じる事が出来たのは彼のおかげだったのだと、留學生活を振り返ってみて実感しました。日本の良いところを話す内に彼は日本に興味をもって来て、将来日本語を勉強して日本で働いて住みたいと語ってくれました。それは経済的な理由もあったのですが、なによりも私の育った国をこの身で感じたいからだと話してくれた時は感涙しました。彼は今ネパールで日本語を勉強し、たまに電話することでお互いに日本語・中国語の勉強をしています。留學生活で貴重な体験をいくつもしてきましたが、なによりも貴重なものはプラナヤという友人ができたことだと思っています。



この報告書で私が後輩に伝えたいのは留学というものは自分を良くも悪くも成長することができるということです。留学する以前、私は積極的には行動しますが心配性で内心はいつも不安がある状態でした。しかし万里の長城でのことやルームメイトと仲良くなれたことを経て、何事もなんとか出来ると前向きに考えられるようになりました。悪く言えばより楽観的になったとも言えますが、これが自分の中で大きく成長したところだと思います。ですから私は来年派遣留学をする後輩たちに色々な経験をして欲しいと思います。面倒なことや嫌なことでもみんなであれば楽しくなりますから、とにかく行動して欲しいです。私の中で後悔は外国人の人と街に出かけたりして交流をたくさん持ちましたが、中国人の人とはあまり交流をもちませんでした。それは彼らの話す中国語が早すぎて聞き取れなかったからです。しかしそこで諦めてしまったことに今後悔しているので、繰り返しになりますが、後輩の皆さんには面倒なことでも色々なことをやって欲しいということです。また、外国の人と仲良くなる秘訣は思ったことをはっきり言うことと相手の国の文化を積極的に学ぼうとすることだと私は考えています。日本人はあまり主張しないと中国の老師に言われたことがきっかけで自分を主張するよう意識して会話するようになりました。留學生活最後にはあなたは良い意味で日本人じゃないように見えると言われたことが身に染みているので、今でもそのようなことを心がけています。

最後に私が皆さんにもっとも伝えたいことは中国という国はとても良い国だということです。留学する以前、私の両親の北京に対するイメージは良くないもので、治安が悪い、反日感情が強いというものでした。このようなイメージを持っている方々は複数人いると思います。たしかに北京ではテレビをつけるとどの時間でも必ずと言って良いほど日本人を悪役に見立てた反日ドラマを放映しており、さらに日本での報道も中国での事件を頻繁に取り上げています。しかし私が実際に体験した北京は夜に一人で歩いても町は明るくて安全であり、反日感情を持つ人は全くいませんでした。国が取り上げる中国でも反日デモやごく少数の一部の人のみで大多数の中国人は日本のことを良く思っています。また「反日ドラマは見飽きてうんざりしている。」、「特に若い世代は反日感情がない」と言う話を聞きました。私のこの体験を両親に物語ると両親の中国への印象は変わり、良い国なのだと認識が変わりました。私はより外国の異文化・国際関係について勉強したいと思ひ、興味の幅もより広がりました。

私達に問題が発生した時に支えて下さった教職員のみなさま本当にありがとうございました。留學を表立って支援して下さった教員の皆様はもちろん、陰ながら支えて下さった職員の皆様、両親、友人の方々に感謝しています。

